

脱個業！チームで児童を育む～高学年教科担任制～

現行の学習指導要領では、小学校では、3、4年生に外国語活動、5、6年生では外国語科が導入されるなど、教科指導において、より専門性が高い指導が求められるようになりました。そこで、授業の質の向上、多面的な児童生徒理解、教員の負担軽減のため、小学校における教科担任を拡充する加配措置の導入が始まり、配置校からは、教員の負担減の効果が報告されています。

高学年教科担任制

- ・国語・算数・理科・体育・外国語を対象に専科加配教員を配置し、活用が進められている。
- ・1校に1名配置する場合や、複数校を兼務する場合など実態に応じて配置が行われている。
- ・教科担任が指導中は、学級担任は、教材研究、事務処理等の業務を行い効率化を図ることができる。
- ・担任外教員を教科担任としている小学校も多い。担当する教科や学年は、各校の実態と担任外教員の専門分野も踏まえ柔軟に行うことができる。

校内での工夫・授業交換

- ・学年やブロック間で教科担当を決めて指導を行う。
- ・年間授業時数が同じ教科間で取り組みやすく、単元で区切って交換するなどできる。

校区での工夫・乗り入れ授業

- ・校区中学校から、兼務発令を受けた教員が小学校の授業を担当する。

学級担任教諭以外が授業を担当する4つのメリット

1 授業の質の向上

- ・教師が担当する教科数の減少や授業外の時間の増加に伴う教材研究が充実する。
- ・教科担任や授業交換では、同じ授業を複数回実施することにより、授業改善が図られ、学力の高まりに繋がる。

2 小・中学校間の円滑な接続

- ・特に、中学校からの乗り入れ授業の場合、児童が安心して進学し、中学校での学習・生活に順応しやすいなど、小・中学校間の円滑な接続に寄与する。

3 多面的な児童理解

- ・複数の教師が教科指導に当たることを通じ、多面的な指導、支援ができるようになる。
- ・学級担任以外にも相談できる教師がいる児童が増加する。
- ・複数の教師が授業を通じて学年全体の状況を常に意識し、児童に関する情報共有等を通じて教師間の連携が深まる効果がある。

4 教師の負担軽減

- ・教師が担当する教科数の減少、授業外の時間の増加により教材研究の充実等とともに時間外勤務の縮減に寄与する。
- ・授業交換を実施する場合を含め、授業準備の効率化につながっている。

（小学校高学年における教科担任制に関する事例集 令和5年3月 文部科学省参照）

教科担任制を活かした学校運営を

- ・学級担任と専科教員が相互に密接に連携できるよう組織体制を見直し、専科教員にも所属学年を位置付けるなどすると学年部の組織力を高め、学級担任の負担を軽減する効果が見込まれます。
- ・日常的に児童の様子を複数で見守ることから、学級担任と管理職で対応しがちな生徒指導事案について、学年部や生徒指導委員会が機能し、学級担任の心理的安全性がより担保されます。
- ・特に、高学年では、児童の中学校へのなだらかな接続を図るためにも効果的であり、中1ギャップの解消の一助となることから、進学先となる中学校教員の負担軽減にも繋がります。